海坊主

田中貢太郎

これは小説家泉鏡花氏の話である。

房州の海岸に一人の壮(わか)い漁師が住んでいた。某日(あるひ)その漁師の女房が嬰児(あかんぼ)の守をしながら夕飯の準備(したく)をしていると、表へどこからともなく薄汚い坊主が来て、家の中をじろじろと覗き込んだ。女房はそれを見て、御飯でも貰いに来たのだろうと思って、早速握飯をこしらえて持って往って、

「これを」

と云って差しだしたが、坊主は横目でちらと見たばかりで手を出さなかった。女房はやさしかった。それではお銭(あし)がいるだろうと思って、今度は銭を持って出

て、

「それでは、これを」

と云ったが、坊主はそれにも見向きもしなかった。女房は鬼魅(きみ)わるくなって、金を持ったまま後すざりして庖厨(かって)の方へ引込んで往ったが、怕(こわ)くて脊筋から水でもかけられたようにぞくぞくして来たので、早く所天(おっと)が帰って来ればと思いながら慄(ふる)えていた。そのうちに四辺(あたり)がすっかり暗くなって、時化(しけ)模様になった海がすぐ家の前でざわざわと浪をたてだした。坊主はと見ると最初の処に突ったったまま身動きもしない。その影のような真黒い坊主の姿を見ると、女房はもういても

たってもいられないので、そっと裏口から隣へ遁げだそうとした。と、そこへ附近の壮い漁師たちがはしゃぎながら船からあがって来た。それと見て女房は駈け出して往って、

「何人か来ておくれよ」

と云って事情を話した。皆血の気の多い連中のことだから、

「そいつは怪しからん、やっつけろ」

と云って、坊主を取り囲んでさんざんに撲りつけ、倒れるところを曳きずって往って、浪うち際へ投げだした。

まもなく所天の漁師が帰って来たので、女房はその話をすると、漁師は何かしら気になるとみえて、飯の後で磯へ出てみたが、そこには暗い海が白い牙をむいて猛り狂っているだけで、それらしいものは見えなかった。

漁師はそれから間もなく寝たが、夜が更けて往くにしたがって外はますます荒れ、物凄い浪の音が小さな漁師の家を揺り動かすように響いた。そして、一時すぎと思う比どこからともなく、

「おうい、おうい」

と云うような悲痛な呼び声が聞えて来た。眠ってい

た漁師ははっとして眼を開けた。悲痛な人声はまた聞えて来た。

「あ、難船だ」

漁師は飛び起きて女房のとめるのも聞かず、裏口から飛び出して磯の方へ走った。と、すぐ眼の前の岩の上に一人の坊主が突っ立っていた。それを見ると漁師は思わず、

「やい、何してるのだ」

と云った。すると坊主は、ぐっしょりと濡れた法衣(ころも)の中から手を出して、黙ったままで漁師の家の方へ指をさした。

「何だ」

漁師が突っかかるようにすると、坊主はまた黙って家の方へ指をさした。漁師が不思議に思って揮（ふ）りかえったところで、己（じぶん）の家の方から火のつくような嬰児（あかんぼ）の泣き声が聞え、それに交って女房の悲鳴が聞えて来た。漁師は夢中になって、

「何しやがる」

と云って、いきなり坊主につかみかかろうとした。と、坊主は白い歯を見せてにたにたと笑ったが、そのまま海の中へ飛びこんで見えなくなった。そこで漁師は己の家へ駈けこんだ。家の中では女房が冷たくなっ

た嬰児を膝にして、　顔色を変え眼を引きつっていた。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。